

ヨブ記28章 27-28節 「知恵はどこにあるのか？」

1A 神の知恵

1B 主への恐れ

2B 十字架の言葉

3B キリスト者の成熟

2A 御霊の賜物

1B 執事において

2B 平和と一致において

3B 全体の益

アウトライン

ヨブ記 28 章を開いてください。私たちは、ヨブ記におけるヨブと友人との討論を読み続けています。午後に 25 章から 28 章までを学びますが、今朝は 28 章の最後の二節を読みたいと思います。

27 そのとき、神は知恵を見て、これを見積もり、これを定めて、調べ上げられた。28 こうして、神は人に仰せられた。「見よ。主を恐れること、これが知恵である。悪から離れることは悟りである。」

私たちは前回の学びで、ヨブがこの世で悪者が一時的にこそすれ、繁栄しているのはなぜなのか？という問いかけを友人に対し、また神に対して行ないました。それに対してビルダデが、神はいと高きところにおられるのだから、人間の営みは小さなことであると答えます。このことに対してヨブは強く反応します。神は、天におられる方であると同時に、地の深い部分にもご自分の目を持っておられる方である。自然の全ての事象に関わっておられるのだと強く言います。そして、友人たちがいかに知識だけの信仰になっていて、現実の世界に適用できていないかを詰ります。

そして、その適用、知恵がどこに見つけることができるのかを 28 章で話し始めます。人は宝石を見付けるために、奥深く縦抗を掘り、その宝を得るのは驚くほどの努力を行います。自分が生きていく上で、その幸いを得るための知恵を見出すことができていないことを話します。いかに経済的に、学問的に優れていても、そしてそうしたことに多大なエネルギーを使っている、自分が生きているということを意味する知恵を獲得していません。

そこでヨブが、結論づけるのです。「見よ。主を恐れること、これが知恵である。悪から離れることは悟りである。」紀元前二千年頃に語ったヨブの言葉は、その約千年後に語られた詩篇にも、箴言にも受け継がれている言葉であります(詩篇 110:10、箴言 9:10)。

1A 神の知恵

1B 主への恐れ

私たちの周りには、知識がたくさんあります。今話したように、宝石を得るためであれば人間が考えつくものには驚くべきものがありますね。知識を得るためには膨大な時間を費やし、努力をします。けれども、私たちはどこまで知恵を持っているのでしょうか？まず、知識と知恵の違いを知る必要があります。知識は、事実を蓄積することです。知恵はその事実を適切に用いることです。このような例えがあります。知識は、小さくて白黒の縞模様のある動物はスカンクであることを教えます。さらに知識は、刺激臭を分泌することも教えます。けれども、知恵は、スカンクが刺激臭を放出する前に立ち退きなさいと教えます。もう一つの例えも紹介します。知識は、グルグル巻きになってガラガラ言っているのは、毒蛇だと教えてくれます。知恵は、そこには近づいてはならないと教えます。ですから、知恵と知識の間には大きな違いがあります。

知識はとてつもなくあるのですが、知恵のないというのがこの世であります。知識のある人が、最も愚かなことをします。その知識の中にあまりにも明らかなこと、こんなことをすればこうなるのだと言っていることを、見事に行ないます。なぜか？知恵がないからです。そこでヨブは、そして後世のダビデやソロモンは、「主を恐れることが、知恵の初め。」と言いました。主を恐れるとは、すべてを知り尽くしている神が仰せになることを最大限敬うこと、そして自分の悟りに頼らずこの方に拠り頼むことであります。これは、教会に与られている命令でもあります。使徒パウロは、コロサイにある教会のことを思ってこう祈りました。「どうか、あなたがたがあらゆる霊的な知恵と理解力によって、神のみこころに関する真の知識に満たされますように。(コロサイ 1:9)」

知識はあるけれども、知恵を持っていなかった人として、イエス様の召命を受ける前のペテロを挙げてみましょう。イエス様が御言葉を教えられていた時に、ペテロは舟から降りていて網を洗っていました。人々がたくさんいたので、イエス様は舟を少し漕ぎ出すようにペテロに言われました。そしてそこから岸辺にいる人々に教えられました。そしてペテロにこう言われるのです。「深みに漕ぎ出して、網をおろして魚をとりなさい。」けれども、夜通しペテロは漁をしていました。何一つとれませんでした。これが、私たちの姿です。この世において生きていくための、私たち人間がよく知恵があります。けれども、そこには虚しさがあります。なぜ、このようなことを行なっているのだろうという徒労感があります。何か、どこかが間違っていると薄々感じているのです。

けれども、ペテロは主を恐れることを選びとりました。つまり、夜通し働いても一匹もとれなかったけれども、イエスが教えられ、イエスが命じられているとおりにやってみようとしたのです。網を降ろしました。そうしたら、舟が沈みそうになるほどの大漁だったのです。ですから、これこそが知恵なのです。主が言われていること、主が呼びかけられていることに応じます。

2B 十字架の言葉

そして神の知恵は、私たちの知っているこの世の知恵と異なることを、コリントの教会においてパ

ウロが教えました。それは、十字架につけられたキリストにある知恵と力です。「十字架のことは、滅びに至る人々には愚かであっても、救いを受ける私たちには、神の力です。それは、こう書いてあるからです。「わたしは知恵ある者の知恵を滅ぼし、賢い者の賢さをむなしくする。」知者はどこにいるのですか。学者はどこにいるのですか。この世の議論家はどこにいるのですか。神は、この世の知恵を愚かなものにされたではありませんか。(1コリント 1:18-20)」

十字架につけられたキリストにある知恵とは、こういうものです。十字架は、私たちが神に罪を犯したことを教えます。私たちが罪人であり、神の罰を受けるべき運命にあることを教えます。したがって、これまで自分の培ってきた知識や経験に真っ向から対抗します。自分を捨てることのできない人は、キリストの十字架を受け入れることはできません。しかし、自分がどうしようもない罪人であると知っている者には、十字架は救いの力となります。愚かで、取るに足りない者で、見下されるような者であると知っている者を神は選ばれ、そのどうしようもない自分が恵みによって救われたのだと証しする者に、神は世の賢者よりも賢い知恵を与えられ、世の権力者よりも強い力を与えられるのです。

この世の知恵と呼ばれているものは、「このようにすれば、このような結果がでる。」ということを教えます。すべて人間主体であります。自分が何かを行なえば、救いが得られるという考えです。しかし十字架にある神の知恵はこう言います。「わたしが主である。わたしが、救いを行なうのだ。」神の御霊が運んでくださるのです。その導きに自分がいかに応答するかが試されています。そのためには、自分自身が神に選ばれた愚か者であるということ、もっぱら神の恵みによってのみ今の自分がいるという認識が必要なのです。

3B キリスト者の成熟

そして、神の知恵は成人の間で共有されると、使徒パウロは述べています。「しかし私たちは、成人の間で、知恵を語ります。(1コリント 2:6)」キリスト者の成熟の中に、神の知恵があります。私たちは「知恵」という言葉を聞くと、物事を上手にやりくりしていく能力と受けとめてしまいます。しかし聖書では、知恵というのは真理の知識の適用であり、あらゆる生活の中で神の御心を選びとる能力であります。

ヤコブ書 1 章の冒頭にこうあります。「私の兄弟たち。さまざまな試練に会うときは、それをこの上もない喜びと思いなさい。信仰がためされると忍耐が生じるということ、あなたがたは知っているからです。その忍耐を完全に働かせなさい。そうすれば、あなたがたは、何一つ欠けたところのない、成長を遂げた、完全な者となります。(2-4 節)」試練によって、自分の信仰が真実にイエス・キリストに根ざしたものと変えられていきます。そして続きにこうあります。「あなたがたの中に知恵の欠けた人がいるなら、その人は、だれにでも惜しげなく、とがめることなくお与えになる神に願いなさい。そうすればきっと与えられます。(1:5)」知恵を神が与えてくださるというのは、私たちがキリストに似た者になるために与えられる知恵です。試練の時に忍耐が与えられ、そこに品性が培

われて、そして愛と希望が聖霊によって注がれる所の知恵です。

私たちに知恵が与えられるように、祈りましょう。コロサイ書 3 章 16 節に次のような勧めの言葉があります。「キリストのことばを、あなたがたのうちに豊かに住ませ、知恵を尽くして互いに教え、互いに戒め、詩と賛美と霊の歌とにより、感謝にあふれて心から神に向かって歌いなさい。(コロサイ 3:16)」知恵を尽くして教えます。キリストの御言葉をいっぱい心に住ませて、教えるのです。そうすると、私たちは感謝に溢れて、心から神に向かって歌うことができます。

2A 御霊の賜物

ところで、知恵のことばが、キリストの教会においては御霊の賜物として挙げられています。「しかし、みな**の益となるために、おのおのに御霊の現われが与えられているのです。ある人には御霊によって知恵のことばが与えられ、**・(1コリント 12:7-8)」神はキリスト者の間に、教会において知恵のことばが満ちることを願っておられますね。

知恵の言葉の賜物というのは、基本的に貯蔵できるようなものではありません。知恵の貯蔵庫のようなものがあって、「何か知りたいことがあれば、私の所に来てください。そうすれば、私の持っている知恵の宝庫を開いてあげましょう。」という類いのものではありません。問題が起き、重要な決断をしなければいけない時に、その時に神が注いでくださる聖霊の満たしです。保管したり、貯蔵できるものではないのです。ですから、私たちは絶えず御霊に拠り頼むことを求め、主が今日、自分に何をしてくださるかを期待しているのです。

そして、知恵の言葉の賜物は、その賜物を用いていることを気づかずに用いられることがよくあります。自分の感じていることをそのまま話したら、それが御霊の与えられた言葉であったということがよく起こります。そのような言葉が与えられた時に、自分の舌が振動して、「ああ、これは知恵の言葉だ！」と電気が走ったようになることはないのです。ある牧師が言いましたが、「御霊は、自然に超自然的なことを行なう。」のです。

私の母親の救いのきっかけを思い出します。実家に戻った時に、私は友人の知り合いの教会に両親を連れて行ったことがあります。かなり拒否反応を示しました。それ以来、しばらくの間、教会というと顔の表情に表れるほど嫌悪感を示していました。けれども、東京に訪問した時に、私の妻が強く、近くにある韓国系の教会に誘いました。その時は、教会をしようとしていましたが、人がほとんどいなかったの知人の韓国人の牧師がしている教会に誘ったのです。かなり嫌な顔をしていましたが、行きました。朝に日本語でしている礼拝に連れて行きました。

すると、実家に戻ってから私に電話をかけてきて、「近くに通える教会はないか？」と尋ねてくるのです！父親もいっしょに行くと言います。そして九か月ぐらい経ってから、母親が信仰告白をし、その三週間後ぐらいに父が信仰告白をしました。それで、なぜその韓国の教会の礼拝に出たのが、

教会に行きたい理由になったのかを尋ねました。信仰をもってから何年も経ってからです。何かどきどき感じるものがあったのでしょうか。韓国人の牧師さんも、何がきっかけだったのか興味津々でした。答えはこれでした。「普通の人たちが来ていた。」そうです、クリスチャンっぽい、品行方正な人たちがいたのではなく、どこにでもいそうな庶民がそこにいたからだということなのです。牧師さんは苦笑いしていました。

これが神の知恵なのです。普通のところに、御霊が働かれるのです。私たちは、だれかが教会を気に入ってくれて、「私たちのどこが良かったのかな？」などと聞かないでください、がっかりするでしょう！私たちの何でもない姿、普通の格好、むしろ自分たちは否定的に考えていたようなことがむしろ、神の御霊が働かれていた知恵となっていることが多いのです。

1B 執事において

知恵は御霊と共に働かれます。私たちが普段は、霊的ではないと思われること、物理的な作業の中に御霊が働かれます。掃除をするとか、会計をするとか、教会に必要なものを購入するであるとか、教会のあらゆる具体的な、物質的な奉仕には「知恵の御霊」が必要であります。出エジプト記で、神の幕屋を造らなければならない時に、神はこのようにされました、「あなたは、わたしが知恵の霊を満たした、心に知恵のある者たちに告げて、彼らにアロンの装束を作らせなければならない。彼を聖別し、わたしのために祭司の務めをさせるためである。(28:3)」もともと衣服や器具について、手に職を持っていた人なのでありますが、知恵の霊で満たさなければ決してできない作業でした。

使徒の働き 6 章において、はっきりと執事、つまり物質面における奉仕が聖霊に満たされていないければいけないことを教えています。教会の中の食べ物の配給で、ギリシヤ系ユダヤ人とヘブル系ユダヤ人の間で対立が起こりました。それで使徒たちは、自分たちは祈りと御言葉に専念すると言いましたが、七人の男を食卓で仕えさせるようにしました。「そこで、兄弟たち。あなたがたの中から、御霊と知恵とに満ちた、評判の良い人たち七人を選びなさい。私たちはその人たちをこの仕事に当たらせることにします。(使徒 6:3)」たかが食卓の給仕、されど食卓の給仕なのです。私たちが、アメリカから日本に戻る時に、日本人の姉妹がこのように励ましてくださいました。「お茶を一杯出すのにも、愛がこもっているかどうかで変わってくるからね。」そうです、一つ一つの小さな事は、物理的にはいとも簡単にできることであっても、知恵の御霊に満たされていないれば決してできないことなのです。

2B 平和と一致において

体を動かす奉仕において、知恵の御霊が必要ですが、知恵の言葉はどのような働きを成し遂げるのでしょうか。ヤコブ書には、知恵の言葉が与えられた後に結ばれる実は平和であるといえます。「しかし、上からの知恵は、第一に純真であり、次に平和、寛容、温順であり、また、あわれみと良い実とに満ち、えこひいきがなく、見せかけのないものです。義の実を結ばせる種は、平和

をつくる人によって平和のうちに蒔かれます。(ヤコブ 3:17-18) 問題が起こった時に、分裂が起こりそうになる時に、その言葉は平和の回復をもたらします。皆が、「そうだ、それが良い。」と思わせる言葉であります。

知恵と言えば、ソロモン王がその霊に満たされていた人でした。彼のところに、二人の女が来ました。どちらも互いに赤ちゃんが自分の赤ちゃんだと言い張りました。もう一人の赤ちゃんは、寝ている間に押しつぶして死んでしまったのです。それで残された赤ちゃんが自分のものだと言い張っていました。そこでソロモンは、そこにいた者に「赤ちゃんを二つに立ちきり、それを半分ずつ与えなさい」と命じました。一人は、「それで結構です」と言い、もう一人は「いいえ、赤ちゃんを彼女にやってください。」と言いました。それでソロモンは、そのあきらめた母親に赤ん坊を与えなさい、彼女が本物の母親だ、と言ったのです。母性本能によって、赤ちゃんが生かされることを願うようにさせたのです。こうやって対立がなくなりました。

私たちの主ご自身が知恵の御霊に満たされた方でした。ローマの硬貨を持ってこられて、「カイザルに税金を納めるのは律法にかなっていることなのかどうか、と尋ねられました。パリサイ人たちは、これでイエスをはめることができると思っていました。なぜなら、律法にかなっていると言えば、ローマに納税するのを酷く嫌っていたユダヤ人たちから人気を失うでしょう。そして、反対に律法にかなわないと言えば、ローマに通報することができ、彼らに逮捕してもらうことができます。完璧な質問です。けれども、イエス様は、「硬貨はありますか。」と尋ねられました。そして、「硬貨にあるのは誰の肖像ですか。」と尋ねられました。カイザルのです、と答えと、イエス様は、「それなら、カイザルのものはカイザルに返しなさい。そして神のものは神に返しなさい。(マタイ 22:21)」と言われました。これを聞いて彼らは驚愕した、とあります。ユダヤ教徒の中で激しい葛藤になっていた神学的問題を、物の見事に平和にまとめられたからです。

そして、初代教会における知恵の言葉を見てみましょう。一部のユダヤ人信者が、モーセの律法に書かれているように割礼を受けなければ救われない、と教え始めました。それで彼らと、パウロとバルナバとの間に激しい対立が起こりました。これは恵みによる、信仰による信仰と相反することであり、福音の神髄に関わる死活的な問題です。彼らはこれをエルサレムに持っていき、その教会で議論を始めたのです。激しい論争がありました。ペテロが立ちました。彼は、異邦人なのに福音を信じ、聖霊のバプテスマを受けたコルネリオの話をして、異邦人にくびきを負わせるのはいけないと言いました。そしてヤコブが立ち上がりました。ヤコブも同じように、異邦人を神が顧みてくださったことを話しました。けれども、異邦人の間でも偶像に供えた汚れた物と、絞殺した物と血とを避けるということは、ユダヤ人に忌み嫌われている異教的な習慣であることは知られていました。それで、それは愛の配慮でできることです。そしてエルサレムの議会は、「聖霊と私たちは」と言って(28節)、決議をしたのです。これも、ヤコブに知恵の言葉が与えられ、ユダヤ人も異邦人も満足の行く解決であり、分裂を防いだ平和の実をもたらしたのでした。

3B 全体の益

最後に、知恵を私たちが求める時に、その賜物を求める時に知る必要があることとお話します。「しかし、みな**の益となるために、おのおのに御霊の現われが与えられているのです。(1コリント 12:7)**」とあります。つまり、御霊の賜物は**キリストの御体の全体のために与えられている**ものです。音楽家は、その演奏を多くの人**が聞くからこそ益**になります。芸術家は**その絵画を多くの人に見てもらうから益**になります。ですから、同じようにキリストの体においても、自分の益のためではなく**全体の益のために賜物が用い**られます。ですから、教会全体における聖霊の働きを知りましょう。自分に何が**できるかを問う**のではなく、教会に神が何を語っておられるのかと、自分が御体の一部なの**だということを知って求めて**いきましょう。

そして、御霊はイエス・キリストを証します。「**わたしが父のもとから遣わす助け主、すなわち父から出る真理の御霊が来るとき、その御霊がわたしについてあかし**します。(ヨハネ 15:26)」御霊が力強く働かれる時に、イエス・キリストの栄光が現われます。イエス様がすばらしい、この方の愛に満たされた、ということになります。イエス様への感謝と賛美で心が溢れんばかりになります。これが、賜物が与えられているかどうかの見分けとなります。

ですから、私たちはヨブを通して語られた神の言葉に従いましょう。知恵は神を恐れるところから来ます。自分で決断しようとし**ないように、主を待ち望みます**ように。心を尽くして主に**振り頼めば、そして自分の悟りに頼らなければ、主がその道をまっすぐに**してくださいます。自分で動いてしまうと、後始末が大変です。どうしてこんな決断をしてしまったのだろうか、と思うでしょう。もちろん神の恵みがありますから、それをも神は益に変えてくださいます。けれども、主を待ってください。主が御霊で満たし、知恵を与えてくださいます。